

来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化 —國學院大學博物館の取り組みを通して—

深澤 太郎
(國學院大學)

はじめに

博物館において宗教文化を「みせる」ためには、どのような工夫が必要なのか。この「ミュージアムでみせる宗教文化」では、神道・仏教・キリスト教系の大学博物館を取り上げ、それぞれの館における取り組みを比較し、かつ共通点を探ってゆく。その前提として、日本宗教に関する研究成果を公開してきた國學院大學博物館の概要を紹介し、今後の議論の糧に供しておきたい。以下では、特に、「来る、見る、体感する」といった3つのテーマに絞って卑見を述べておく。

I. 國學院大學博物館に来る

(1) 博物館の概要

國學院大學博物館は、1928年（昭和3）創立の「考古学標本室（後の考古学資料室、考古学資料館）」と、1963年（昭和38）に設けられた「神道学資料室（後の神道資料館）」を淵源とし、2023年（令和5）で創立95年、2028年（令和10）で創立100年を迎える大学博物館である。1882年（明治15）の皇典講究所開齋と同時に「文庫」として創立された「國學院大學図書館」に次いで歴史の長い大学附置機関であり、「学術資料館」への統合や、「伝統文化リサーチセンター資料館」の設置を経て、2012（平成24）から「國學院大學博物館」と名称を改めた。現在は、同じく研究開発推進機構内の考古学・神道学研究を担う「学術資料センター」と、1977年（昭和52）創立の校史資料室を前身とする「校史・学術資産研究センター」とともに、大学ミュージアム活動の中核を担っている。

その使命は、1) 日本文化の特質を明らかにするための研究、2) 本学学生に対する教育参考、3) 社会に開かれた大学の窓口としての社会貢献の3本柱であり、展示・出版・普及事業・データベース構築などを通して、研究・教育・公開の実を挙げてきた。館内には、直接の来館者に日本文化と神道に関する理解を深めて頂くため、総合日本学

としての「国学」の興りと、國學院大學における研究の歩みを紹介する「校史展示室」、考古資料から日本列島の人類史を概観する「考古展示室」、神道をはじめとする日本宗教の姿を示す「神道展示室」、そして特別展・企画展などを実施する「企画展示室」を設けている。企画展示は、本学が実施してきた研究成果を公開する場でもあり、歴史・文学・宗教関係を中心に、金田一京助没後50年・久保寺逸彦没後50年に合わせた『アイヌプリー北方に息づく先住民族の文化―』展や、沖縄返還50年を記念した『うちなーぬゆがわりやー琉球・沖縄学と國學院―』展など、アイヌ文化・琉球文化も含め、広く社会の関心を集めているテーマにも積極的に触れてきた。

(2) 博物館の展示

國學院大學博物館の常設展示は、校史・考古・神道の各展示室を中心としている。但し、博物館施設の設えとしては、来館者の動きを規制する強制道線を採用してはならず、自由に観覧できる形を採ってきた。その中でも、日本の宗教文化に特化して理解を深める観覧順路としては、本学による研究の歩みを辿る 1) 校史→考古→神道展示室コース、日本列島における宗教史をダイジェストで通観する 2) 考古象徴展示→三輪山祭祀遺跡→神道展示室コース、そして神道の概要を理解する 3) 三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室コースを薦めたい。

i) 國學院大學の研究成果コース（校史→考古→神道展示室）

第1のコースは、各展示室を順番に巡る通常の順路であり、本学が積み重ねてきた研究活動に基づき、日本列島における人類史と、神道をはじめとする日本宗教の特質を明らかにするものである。

ii) 日本列島の宗教史コース（考古象徴展示→三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室）

第2のコースは、考古展示室冒頭の象徴展示、すなわちモノリス状のハイケース群に先史時代以来の宗教文化に関するマスターピースを展示することによって、日本宗教史のダイジェスト的な理解を促すことから始まる。突き当たりには、今日的な日本宗教の原型が確立されていった中世の鏡像を展示しているが、古墳時代の祭祀に関する展示コーナーから右折すれば、後述する「三輪山祭祀遺跡展示」を経て、神道展示室へ入ってゆく。

iii) 神道と日本文化コース（三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室）

第3のコースは、奈良県桜井市大神神社の神体山である三輪山の麓、山ノ神遺跡における磐座の様子を再現したコーナーを起点とするもの。古墳時代における祭祀遺跡の姿から、神祇祭祀の原型が形成されてゆく様子を捉えた上で、古代の公祭、神仏習合の中の神道、そして四季の祭礼などについて学ぶ神道展示室を観覧する。

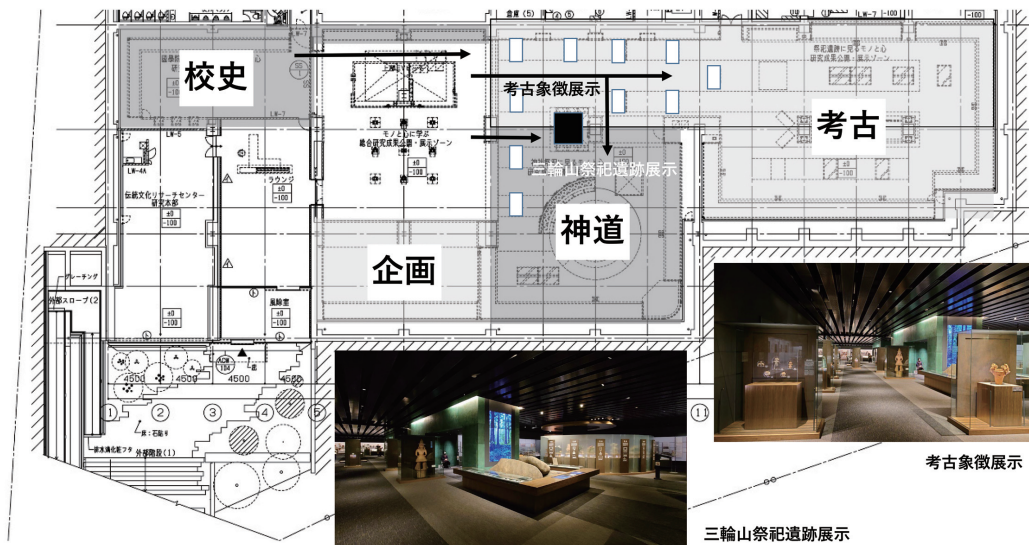


図1 館内概要図

Ⅱ. 國學院大學博物館で見る

(1) 神道のはじまり—非創唱宗教の展示—

博物館資料は、何よりも実物であるという点に、来館者の心をキャッチする重要なポイントがある。しかし、それは、あくまでモノが辿ってきた最終段階の姿であり、誰が、何のために作って使った（場合によっては廃棄に至った）のか、というプロセスやコンテキストを示しにくい点に難があった。とりわけ、宗教を含む人の心の問題を、どのように展示するかという課題は大きい。

就中、当館の主要な展示テーマである神道は、仏教・キリスト教・イスラム教などの創唱宗教と異なり、明確な教祖・教義・教典を伴わずにはじまった経緯がある。従って、その展開過程や内実についての展示は、曖昧なものにならざるを得ない。しかし、2世紀後半まで「大乱」の中にあった倭国において、多様であった各地の葬祭が解体され、大型前方後円墳を頂点とする新しい墓制が汎列島的に支配的となった3世紀半ばの現象は、その間に新たな国家と宗教、すなわち「日本」と「神道」の原型が生まれた事実を示唆するものである。そして、かかる古墳時代の神祭・葬祭が、律令期に確立する神祇祭祀へと展開してゆく経緯については、考古・神道の両部門を擁する当館ならではの取り組みによって、より明快な説示が可能になるであろう。

(2) 信仰者の視点—信仰対象としての博物館資料—

ところで、宗教資料をどのように見せるのか、という点にも様々な課題がある。モノである博物館資料としての宗教資料は、学術的な研究対象である以前に、信仰の対象であったり、信仰の美術であったり、信仰の記録であったりするのだ。

宗教資料の「見せ方」というテクニクの部分でも、単に製作技法・使用痕跡などの諸特徴を見易く説示するだけではなく、信仰者の視点を理解した展示を心掛けるべきであろう。ある時、展示ケースの中の仏像・神像に対して、来館者が「こんな所に入れられてかわいそうに……」と呟いた場に遭遇したことがあった。以後、宗教資料を展示する際は、可能な限り周囲に余計なものを置かず、来館者が思わず手を合わせたくするような雰囲気演出にこだわっている。例えば、筆者が伊豆国走湯山（現在の伊豆山神社）の歴史に関する特別展『走湯山と伊豆修験』を担当した際には、下から蠟燭や護摩の火に照らされているようなライティングを試み、かつて実際に祀られていた当時の文脈・雰囲気が来館者に伝わるよう工夫したことがあった。

一方、博物館で展示している宗教資料の中には、その性質や、原資料所蔵者の意向などによって、写真撮影禁止とせざるを得ないものが少なくない。この点は、多くの博物館施設が、展示資料の撮影を可とし、データベースの画像も著作権フリーで公開する流れが加速してゆく中、改めて検討を要すべき課題と捉えている。なお、これは神道をはじめとする日本宗教そのものに関わる問題ではないものの、人骨を展示した際には、「○○遺跡から出土した人々は、私たちと同じ現生人類です。観覧・撮影等にあたりましては、人間の尊厳にご配慮いただきたくお願い申し上げます」というパネルを掲げたことを付言しておく。

(3) 信仰の空間、宗教的な行為

博物館で展示しにくいものは、「空間」である。かつて、富士山が世界遺産に登録された際に『富士山—その景観と信仰・芸術—』展を開催したが、当然のように富士山を展示室に持って来るわけにいかない。従って、展示し難い「空間」をどのように説示するのかという点も課題となる。つまり、三次元的なものを二次元（画像・動画）に編集したり、それを更に立体模型や3Dイメージで示したり、関連する展示資料にまつわる情報をQRコードなどで閲覧可能にしたりするなどの工夫が必要になるのだ。例えば、『走湯山と伊豆修験』展では、今の伊豆山神社にあたる走湯権現の中核域について、地形の立体模型を作成した上で、航空写真、地形図、地質図や、前近代の伽藍配置図などをプロジェクションマッピングで示す取り組みを実践した。

また、博物館で展示される宗教関係資料からは、それを作って使った状況、つまり宗教行為の実態を直ちに察知することが困難な場合が多い。通常は見ることでできないエソテリックな宗教行為の現場については、特に撮影・録音等を許可された画像・

動画などを用いて、モノ資料にまつわる「行為」を適切に説示すべきであろう。具体的には、全国各地の社寺で行われる祭祀・祭礼の動画をタッチパネル式画面で館内放映したり、変容してゆく神事芸能に関するアーカイブを蓄積して「國學院大學デジタルミュージアム」で公開したり、YouTube サイトの「國學院大學オンラインミュージアム」において常設展・企画展・特別展開連の番組を作成してオンライン放映するなど、体系的な情報の整理・公開に努めているところである。なお、音声・字幕を付した YouTube 番組は、交通や障害によって直接の来館が難しい方々への便を図るとともに、新型コロナウイルス感染症などの防止に関する点でも効果を発揮した。

Ⅲ. 國學院大學博物館で体感する

(1) 日本文化を知るために一日本と世界を比較するー

以上、モノ資料と、それにまつわる空間・行為を如何に説示するか、という問題に触れてきたが、やはり宗教文化を「体感」ということも重要であろう。コロナ禍によって、対面事業が難しい局面もあるが、「日本文化を体験する夕べ」と題して、

國學院大學博物館
Kokugakuen University Museum

世界の宗教
を知る ワークショップ

参加無料
要事前申込

國學院大學は、日本文化発信の拠点です。しかし、異文化に対する尊敬と関心を欠いては、自らの文化を理解することはできません。そこで、当館の展示と連動して、世界と日本の宗教を体感・実感するワークショップを企画しました。本学が所在する渋谷・横浜で異文化を学び、日本を見つめ直す機会。ぜひ、ご参加ください。

1	JUDAISM	8月28日(金)
2	ISLAM	10月4日(日)
3	SHUGENDO	10月18日(日)
4	TAOISM	10月25日(日)

平塚 27 年度文化庁「地域伝統文化振興事業」
東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業

SHINTO
11/6 SUN
神道を知る

CHRISTIANITY
11/13 SUN
キリスト教を知る

HINDUISM
11/19 SAT
インド文化とヒンドウ教を知る

世界の宗教
を知る ワークショップ Part.2

参加無料
FREE

SPECIAL PROGRAM
11/23 WEB and 12/17 SAT

国學院大學博物館
Kokugakuen University Museum

昨年年度に引き続き、当館の展示と連動して、世界と日本の宗教を体感・実感するワークショップを企画しました。異文化に対する理解と関心を持つことで、改めて日本を見つめ直します。

全コース共通
【対象】 中学生以上 【定員】 各回 30名 (抽選)
応募多数の場合は、抽選期間終了後に抽選とさせていただきます。

MUSEUM TALK
パステル・パターナラタム・ムハンマド・ザヒド連動展
「イスラームと文化遺産」
特別講演
国学院大学 井上順孝教授
「世界の宗教が禁じてきたもの」

もっと日本を、もっと世界へ。

平成 28 年度文化庁「地域の伝統文化振興事業」
東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業

図2 ワークショップ「世界の宗教を知る」・同 Part. 2

主に在日外国人の方々や、留学生を対象に雅楽を聞き、狩衣を着る体験イベントを開催して好評を博した経験もある。日本の文化を、我々日本人自身が理解することも大切だが、外国の方々の理解を深めて頂く取り組みも実施をしているのである。

同時に、神道をはじめとする日本文化の特質を理解するためには、日本宗教・日本文化と、世界の諸宗教・異文化と比較する取り組みが欠かせない。そこで我々が企画したのが、「世界の宗教を知るワークショップ」である。幸い、本学渋谷キャンパスが所在する渋谷区には、日本ユダヤ教団、聖ドミニコ・カトリック渋谷教会、そしてイスラム教のモスクである東京ジャーミイなどがあり、たまプラーザキャンパスが所在する横浜市の中野区には、関帝廟・媽祖廟といった道教寺院が存在する。そして、渋谷区には、明治神宮をはじめとする多数の神社や、修験道の山であった相模大山へ通じる大山街道 246 号線も存在する。かかる当館の環境を活かして、日本の神道・修験道や、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などの諸宗教に関する特集展示・展示解説を実施し、これに加えて現地の宗教行事に参加させて頂くなど、本学学生や、一般の方々を対象とした行事を実施したのであった。これはまさに、博物館に「来て、見て、知る」の実践であるといえよう。

(2) 宗教系大学博物館連携と異文化相互理解—日本の中の世界、世界の中の日本—

このように、現代の日本には、多様な国々から来訪した方々だけでなく、アイヌの人々などの先住民族や、在日外国人も暮らしを営んできた。私たちは、このような日本列島の本州を中心とする地域「以外」に由来する文化と、いわゆる日本文化との比較こそが、彼我の文化を理解することに繋がると確信している。

かかる観点から、2014 年（平成 26）にキリスト教系の西南学院大学博物館と「西南学院大学博物館と國學院大學博物館との研究協力に関する協定書」を取り交わし、互いに日本文化とキリスト教文化などを紹介する年数回の相互貸借展示、ワークショップのほか、大きな特別展も共同で開催してきた。これは、2013 年度（平成 25）に、西南学院大学側からの提案によって特別展『日本信仰の源流とキリスト教—受容と展開、そして教育—』を共同開催したことに端を発する。その上で、2018 年（平成 30）に再び「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界文化遺産登録記念として、特別展『キリシタン—日本とキリスト教の 469 年—』も開催した。同展覧会は、もはや日本の伝統宗教の一つであり、隠れキリシタンの問題も含めて日本文化の一端を構成していると言っても過言ではないキリスト教を取り上げ、「日本の中の『世界』」が「日本化」してゆく過程を含めて歴史的な展開を概観したものである。「日本の中の『世界』」に目を向けることは、ひいては「世界の中の『日本』」について考えてゆく契機にもなるであろう。

おわりに

最後に、これからの宗教系大学ミュージアムが果たすべき役割についても述べておこう。

冒頭に述べた通り、独自の研究、学生に対する教育参考、社会に対する研究発信の3点が、大学博物館の主要な使命となるが、今後の宗教系大学博物館においては、宗教文化研究を介した社会のハブとして機能することも求められてくるに違いない。

特に、2000年代以降は、大きな戦争・紛争、あるいは社会の貧困化をきっかけとして、異文化・異民族・異宗教に対するフォビアが、世界的な規模で顕著になってきた。このような人類社会の危機に対しては、学生のみならず、一般社会に対する「宗教リテラシー」の涵養に向けた支援も欠かせない。日本文化を講究してきた國學院大學の博物館においても、異文化・他宗教との比較を通して彼我の特質を明らかにし、人間集団のアイデンティティと密接に関わってきた宗教への理解を深め、これを尊重する態度を養ってゆくことが大きな役割の一つになるのではないかと考えている。

展示するモノと展示するコト —仏教文化の視点から—

熊谷 貴史

(佛教大学宗教文化ミュージアム 学芸員)

はじめに

佛教大学は浄土宗の宗門校である。佛教大学の附置機関である宗教文化ミュージアムは、京都の近郊、嵯峨広沢に所在する。長閑で美しい嵯峨野の風情を味わうことができる反面、交通アクセスにやや難があり、一般的な京都の観光コースには組み込みにくい。おそらく何かのついでに立ち寄る来館者は少なく、「宗教文化ミュージアムへ行く！」という確固たる決意を要する、と思われる。著名な観光地、また博物館・美術館の選択肢が多く存在する京都にあって、どのようにすれば当館へ足を運んでいただけるだろう。いや、そもそも存在を知ってもらう必要がある。という悩みからはじまる話。

1 佛教大学宗教文化ミュージアムのとある事情

当館は、2003年に設置された佛教大学アジア宗教文化情報研究所を母体とし、2008年に佛教大学宗教文化ミュージアムとして改組された。2014年、博物館相当施設（現・指定施設）に指定。佛教大学の建学の理念である仏教精神「仏教を開いたゴータマ・ブッダ（釈尊）と浄土宗を開いた法然上人とに共通する生き方と考え方」を基軸に、広く「宗教文化」を視野に入れたミュージアムである。

ミュージアムへの改組後も、研究所時代の事業や成果などを踏襲し、また有形資料の収集を主たる目的としない方針を引き継いでいる（研究所時代に「情報」を重視していたことによる）。例外的に、本学のキャンパス開発時に出土した考古資料のほか、学内他部署より移管された幾つかの資料群を保管してはいるものの、館名に掲げる「宗教文化」に関する展示を継続的に構成しうる資料群とはいいい難い。換言すると、「宗教文化」にまつわる「展示するモノ」をほぼ所蔵していないのである。したがって展示品は、概して外部からの借用品あるいは寄託品による。

ところで発表者は、当館の学芸員として第三世代にあたる。展示に関して、前身の

研究所時代からミュージアム改組後の初期を担った学芸員は、当館の可能性を模索するような活動を展開、特定の地域や寺院の調査を重ね、その成果を展示に反映した。その後を引き継いだ学芸員は、展覧会の方針や枠組みを整理し、浄土宗に焦点をあてた企画、いわば宗門校として堅実なスタンスの展覧会を重ねた。さらに2018年より発表者の世代が着任して現在へ至るが、前任者らが蓄積してきた活動や成果を受け継ぎながらも、やはり展示の在りようには変化がある。担当者によって趣向が変わることはある意味で必然かもしれない。しかし根幹となる「宗教文化」に結びつくコレクションを所有していないことが、その傾向をより顕著にしているだろう。

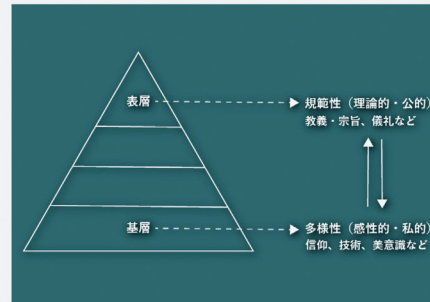
ともあれ現状、仏教・浄土宗を念頭において展示を構想する際には、「浄土宗に特化したテーマ」と「浄土宗を相対的に特徴づけるテーマ」のいずれかを意識することが多い。このうち前者は、宗内や学内の一定の来館者層を見込めるものの、より多くの層に来館を促すことは（館の規模や立地の問題もあって）難しい。そこで近年、浄土宗に限定しないテーマを設定し、そこに浄土宗に関する事項を含めることにより、相対的に浄土宗の特徴にも眼を向ける展覧会シリーズを企画した。特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」（2019）、特別展「ほとけのヘアスタイル―それは単なるオシャレではない―」（2021）、特別展「ほとけのドレスコード」（2022）などである。これらを含め、発表者が担当した幾つかの展覧会を取りあげ、仏教文化の視点から「ミュージアムでみせる宗教文化」に眼を向けよう。

2 宗教文化／仏教文化の捉え方

前提として、本報告における「宗教文化」あるいは「仏教文化」の捉え方を確認しておく。ここでは、ある宗教の在りようを多層的（表層―基層）に捉え、教義や宗旨を「宗教」の表層、基層に展開する多様な事象（必ずしも教義や宗旨に縛られない事柄）を含む概念を「宗教文化」と考える。「仏教文化」は、「仏教」に関わる人間の諸活動を包括する。例えば仏像（仏教尊像）には尊容を方向づける教義・宗旨・図像などがあり、それを指南する僧侶とともに、発願者・制作者・拝観者たちがそれぞれの立場で関与する。制作者の造形技術は、教義や宗旨とは異なる次元で仏教文化を支える要素のひとつ。仏像は有形、技術は無形の仏教文化といえる。

また仏教は、それ自体が極めて多様な側面をもつ。時代や地域を経て成立・伝播した膨大な仏典群と多くの宗派、それぞれに特徴的な思想や活動、そして造形物がある。宗門校を設置する宗派も多く、附属の博物館も散見する。公立館・私立館を問わず仏教に関する展示をよくみかける。展示の対象となりうるテーマや事物のヴァリエーションは、今回、ご一緒させて頂いた神道・キリスト教の方々に比して相対的に多そうである。この点に、仏教特有の事情がひとつあるかもしれない。多くの仏教関連の

- 文化と宗教／宗教の文化 cf.文化⇔自然
- 宗教文化：ある宗教の在りようを多層的（表層－基層）に捉えた場合、基層に展開する多様な事象を含む概念（それに眼を向ける視点）と考える
- 仏教文化：仏教に関わる人間の営み全般／習合現象を含む
- 仏教そのものの多様性：伝播・変遷／膨大な仏典群／多くの宗派・宗旨
- 宗教的造形物（造形活動）
- ex.尊像：寺院の本尊・信仰の対象／
発願者・制作者・拝観者／
図像と表現／素材や技法
- 仏教美術と文化財
- 宗教的な行為・機能・情操
- 禁忌・秘事（⇔公開）



仏教文化

図1 「仏教文化」をめぐる視点

展示が企画されるなかで、おそらく発表者の企画はイレギュラーな部類に属す。お声がけ頂いた理由もそのあたりにあるのだろう。その意味で、仏教や仏教文化に関する展示を代表するようなスタンスではない。

なお、ここで「宗教文化」「仏教文化」という場合の文化は、いわゆる指定文化財のような価値づけとは異なるものも含む。例えば、尊像の安置方法や法衣の着装方法などである。また発表者は仏教美術史を専門としているが、美術や芸術という概念にも留意が必要な場合がある。仏像を拝観するとき、あるいは仏像の話題をとりあげるとき、文化財や仏教美術という捉え方に違和感を抱かれる寺院関係者も少なくない。展示に向けてご相談するときには、尊像や什宝を護持されてきた立場を尊重しながら、当方も意を尽くす。ご住職のご意向のみならず、檀家総代の同意を要するケースもあり、そのようなあり方も広義の「宗教文化」や「仏教文化」といえるかもしれない。

3 展示するモノ

物質性をもつ有形の展示品を「モノ」と捉えよう。しかし、仏像を「モノ」と呼ぶには躊躇がある。という感覚もまた、宗教文化の範疇といえようか。仏像は開眼を経て祀られ、移動・修復・浄焚などの際には御性根を抜く（撥遣・閉眼とも）。信仰対象である、という性格が根幹にある。仏教に関する展示では、様々な観点からこの点に配慮する。この事情は当館に限らないだろう。

ともあれ展示を構想する際には、まず「実物」を展示する可能性を考え、諸条件

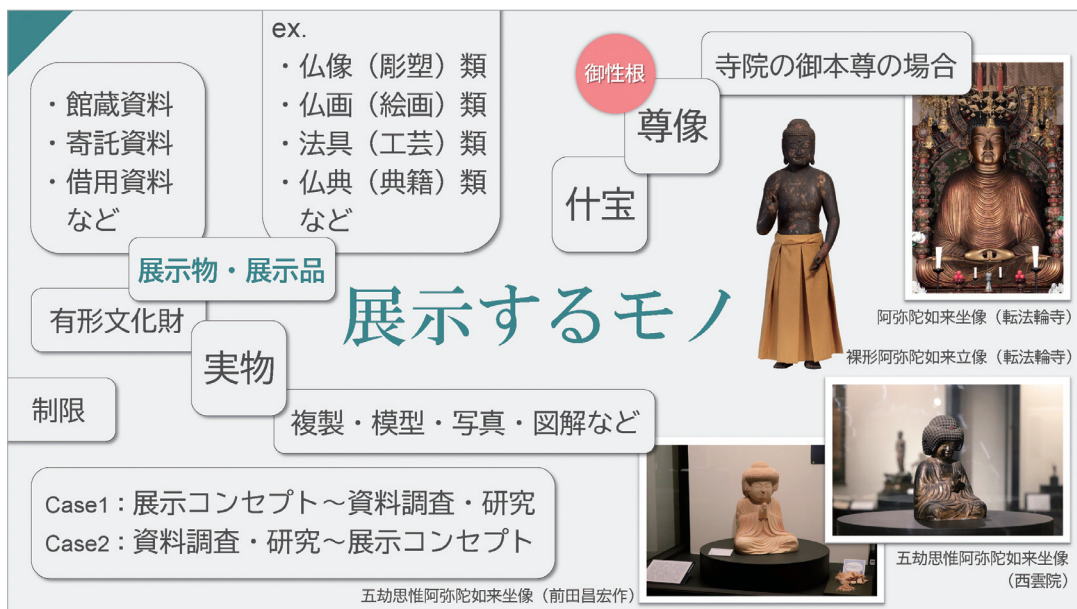


図2 「展示するモノ」をめぐる視点

（所有者の意向・安置状況・指定状況・保存状態など）を確認する。とくに寺院の御本尊として祀られる仏像は、寺院の営みを考慮し、慎重に検討する必要がある。諸条件が整い、関係各所の許諾を得た場合は、信仰対象である仏像を博物館で展示させて頂くことがかなう。一方、諸々の制限により実物の展示がかなわない場合には、複製・模型・写真・図解などの二次資料を援用して展示を構成することもある。むしろそれらは実物が具える情報量、あるいは魅力に及ばず、しばしばレプリカをめぐる議論で指摘されるように、観覧者も実物を期待する傾向がある。二次資料のみで構成された展示の例も知られるが、現状は特殊な部類に属すだろう。むしろ二次資料の製作も形態によってはそれなりの費用や時間を要し、実現には一定のハードルがある。

ところで発表者の場合、展示コンセプトを大まかにつくり、それに相応しい展示品の候補を選定し、調査・出陳交渉を重ねて展示に反映する場合が多い（継続的・悉皆的な調査の成果に基づいて展示コンセプトが案出される場合とは順序が逆になる）。特別展「ほとけのヘアスタイル—それは単なるオシャレではない—」（2021）も、先立つ展覧会の後継企画として、テーマやコンセプトは早い段階で固まっていた。如来の螺髪、菩薩の髻、明王の焰髪など、仏尊・仏像の髪に焦点をあてよう。そして浄土宗にまつわる事項として、五劫思惟阿弥陀をとりあげたい。阿弥陀如来は、かつて法蔵菩薩であったとき、衆生を救うために長い時間（五劫）思惟したという。この思想を背景とする五劫思惟阿弥陀如来像は、髪が長く伸びた状態を表し、長い時間の経過を表象する。ただし螺髪という仏（仏陀／如来）特有のヘアスタイルを基調とするため、

ロングヘアではなく、ボリューム感を増し、しばしばアフロヘアに擬えられる。これはぜひ事例を展示したい。しかしながら準備は難航。というのも新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、外部での調査が困難な状況が続いたからである。

そこで従前お世話になっている仏師の前田昌宏氏に、無理を承知で尋ねてみる。五劫思惟阿弥陀如来像の新造である。「いいですよ」と二つ返事。この造像は、模像や複製ではなく、あくまで前田氏のオリジナル作品とすることにした（形式を参考にした御像は存在する）。その顛末および成果は、試論的に別稿「現役仏師が造った仏像の展示—レプリカではないことをめぐって—」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』18、2022）に記したが、この新造の五劫思惟阿弥陀如来像は「模型的機能を担うオリジナル作品」と位置づけておく。また制作の記録と彫技の分析を通じ、古像の造形を読み解く手がかりを得たことは、副産物的な成果であった。

なお平行して展示可能な五劫思惟阿弥陀如来像の調査を進め、結果的には江戸時代の作とみられる小像の出陳がなかった。前田氏による新作とあわせ、五劫思惟阿弥陀のボリューム感あふれる特徴的なすがたは、立体造形物の展示によって強く印象に残っただろう。

さらにこの展覧会では、別途、前田氏が制作を手がけていた未完成の不動明王像を展示させて頂いた。不動明王も特徴的な髪をもつ仏尊であり、展覧会の趣旨に合致する。そしてこの御像は、将来、寺院に納められる。したがって信仰の範疇においては本物、いわば真正性を具えることになる。また展示期間中、前田氏のご都合のよい時には当館内で適宜制作を進めてもらい、その様子を来館者が見学できるようにした。制作が進むと、過日のすがたは二度とみることができない。制作の場は、前田氏の気さくな人柄もあって、観覧者との対話を含む和やかなムード。いずれ寺院にお祀りされた際には、あらためてお参りに行きたいという声もあった。前田氏と施主のご住職のご厚意によって実現した、実験的な展示であった。「展示するモノ」としては未完成の仏像であるが、仏像制作の工程や技術という、無形の仏教文化を垣間見ることができる。後述の「展示するコト」に結びつく視点である。

なお前述の五劫思惟阿弥陀如来像は、展覧会の終了後も寄託品として平常展示などで活用させて頂いていたが、後日、京都市内のある浄土宗寺院とご縁を得て、奉納されることになった。喜ばしいことである。しかし「展示するモノ」がひとつ減った。と思っていたら、発表者を哀れんだ前田氏が二代目を制作してくださることになった。現状、木組みをした段階で展示をしている。初代は展覧会に向けた急ピッチの制作であった。今回はなるべく時間をかけ、ゆっくり制作を進めて頂くことにしよう。観覧者が次に来館される際には、少し彫り進められているかもしれない。

4 展示するコト

当館は宗教文化シアターという劇場施設を併設している。主に大念仏狂言や六斎念仏などの民俗芸能、いわゆる無形文化財の実演や記録上映などを実施する。開館以来、「展示」と「実演」を同じウエイトで重視する方針がとられ、おそらく展示は有形、実演は無形、という暗黙の棲み分けがあった。しかしこのカテゴライズは、展示の視点や可能性を狭めているかもしれない。仏教文化に属す無形の事象は多岐に及ぶ。無形の仏教文化に眼を向けるような展示。あるいは有形の仏教文化にともなう無形の事象など。様々な視点や方法がありそうだ。

仏尊・仏像の手に焦点をあてた特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」(2019)では、四国地方のある寺院より千手観音像の手部の断片群を借用した。千手観音なので手首先の部材だけで沢山ある(展示には保存状態のよい一部の部材を選定)。どのように展示するか検討の末、通常は眼にすることのない部分や角度が見えるよう、円形の展示台上にランダムに配置することにした。視覚的なインパクトもある。個別には丸みを基調とする平安時代の作とみられる菩薩の手。持物(亡失)に応じてニュアンスを変える手指、断片ながら存在感がある。このうち明らかに後補とみられる部材があり、それはクイズ形式で観覧者に探してもらうことにした(答えは展示室内の別の場所に掲示)。このような視点でみると、この断片群には無形の仏教文化が幾つも付帯している。菩薩の手を造形する技術。破損した菩薩の手を補作する態度や技術。断片となってなお現在に至るまで護持してきた態度。広い意味で仏教文化と捉えうる



図3 「展示するコト」をめぐる視点



図4 特別展「ほとけの手—黙して大いに語る—」(2019) チラシ・展示風景

事象は多そうである。この展覧会の時点では、そこまで強く意識はしていなかったが、「モノ」にまつわる「コト」をみせる展示を模索していたように思う。

次いで、後継企画となる特別展「ほとけのヘアスタイル—それは単なるオシャレではない—」(2021)を開催。この展覧会では、前述の通り現役仏師による新造の仏像



図5 特別展「ほとけのヘアスタイル—それは単なるオシャレではない—」(2021)
チラシ・展示風景

を展示したほか、幾つか実験的な展示を試みた。ひとつは仏像の正面観をはずした展示である。展示室に入って最初に眼に入る展示ケースには、如来像頭部（金戒光明寺蔵）の左斜側面が見えるように展示。別途、パネルで紹介した螺髪制作工程と合わせてみると、頭部の局面に粒が整然と並ぶタイプの螺髪の特徴を視覚的に把握することができる。また宝冠釈迦如来坐像（清浄華院蔵）は、如来ながら髻を結う珍しい像容。通常、髻は高い位置にあって見えにくく、後方の造形を眼にする機会も少ない。そこで御像の背面がみえるように展示した（この展示は賛否両論があった）。菩薩像に多くみられる髻には、実に複雑な形状も散見する。このような結い方は実際に可能なのだろうか。という疑問から、床山の経験をもつ方にご協力をいただき、近しい関係者の頭髪やカットマネキンで再現を試みた（結果は展示や図録に反映）。

「モノ」にまつわる「コト」を組み込み、観点を増やす。寺院や他館で仏像を拝す際、その観点を思い起こして頂ければ広がりをもつだろう。この展覧会と同時期、京都市内のある寺院で五劫思惟阿弥陀如来像の特別公開があった。また近隣の博物館でも特徴的な頭髪の表現をみせる仏像が展示されていた。しばしばそれらと関連づけた感想を頂戴したことは、企画者の意図に合致し、嬉しい。ただし連携していたわけではないので、内々に「勝手にコラボ」と呼んでいる。

シリーズ第三弾として、特別展「ほとけのドレスコード」（2022）を開催した。仏尊・仏像は、どのような衣を、何枚、どのように纏っているのか。この着装方法は「コト」として提示できる。さらに仏像全般に通じる敷衍性をもつ。チラシのメインビジュアルには、裸形阿弥陀如来立像（転法輪寺蔵）を掲載することにした。本像は



京都・転法輪寺 裸形阿弥陀如来立像

図6 特別展「ほとけのドレスコード」（2022）チラシ・展示品

裸形着装像と呼ばれ、裸形の尊体を造り、実際に衣を着装させてお祀りする尊像である。ただしチラシは、一見、裸形像とは判らないようにデザインした。会場で驚いてもらおう。衣に焦点をあてた展覧会の導入に、衣を着けない仏像を展示する。所蔵されている寺院では、現状、下半身に裙と呼ばれる衣を着けて安置しているが、寺院のご許可を得て、裙は外し別のケースに展示した。ともあれ裸形の尊体に衣を着装させるという様態は、どのような衣を、何枚、どのように纏っているのかという「コト」の把握のうえに成り立つ。展覧会の趣旨に相応しい。と思いながらの準備中、ちょっとした問題が発生。とある国立博物館で、裸形着装像のレプリカを用い、法衣のまとい方を実演・解説する子供向けのイベントが催されていたのである。趣旨が被ったうえにクオリティーが高い。これも「勝手にコラボ」ということにする。

衣にまつわるトピックとして衣文にも注目した。仏像には、Y字形衣文、翻波式衣文、渦文など、特定の名称で呼ばれる衣文がある。これらは果たして実際の着装のなかで生じる形象なのだろうか。ひとまず布地で再現を試みる。また前出の前田氏に衣文のモデルを制作して頂いた。検証の結果、これらの衣文には、実際の着装にイメージソースが求められる形象、彫刻技法に起因する要素、着装とは直結しないイメージソースなどが推察され、仏像に衣文を表す「コト」の背景（の一端）が垣間見えた（結果は展示や図録に反映）。特徴的な渦文を具える薬師如来立像（神光院蔵）をめぐって、展示した「コト」である。

以上のシリーズ企画とは別の担当展覧会から、展示に反映した「コト」の事例を加えておこう。特別展「チベット密教の美と祈り―北村コレクションより―」（2019）は中島小乃美氏（本学保健医療技術学部准教授／当時）をコーディネーターに迎えた展覧会である。日本仏教とは異質の思想や造形を通じ、仏教の多様性に眼を向けたこの展覧会では、導入の象徴的な展示物として、ミュージアム入口付近に立体マンダラを展示した。立体マンダラには方位が設定されている。しかし展示スペースの条件により、現実の方位に合わせて設置すると、観覧者はまず立体マンダラの背面を眼にすることになる。検討の末、儀礼で用いる状況に倣い、実際の方位に合わせる「コト」を優先して展示した。詳細は別稿「立体マンダラ小考―展示に基づく空間表現への視座―」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』16、2020）を参照されたい。

最後に浄土宗に眼を戻そう。浄土宗寺院では、基本的に阿弥陀如来像を御本尊として祀る。阿弥陀如来像が単独で祀られるほか、観音菩薩像と勢至菩薩像を伴う三尊構成の場合もある。さらに浄土宗特有の「コト」として、御本尊の左側（向かって右側）に善導大師像、右側（向かって左側）に法然上人像を安置する。また善導大師と法然上人の並称として両大師と呼ぶ「コト」がある（『新纂 浄土宗大辞典』「両大師」項）。当館でも時折、両大師の御像を展示する機会をもつが、その際、一具の像であれば必然的に前述の配置で展示する。しかし一具ではない場合、例えば離れた位置の別の

展示ケースに配す場合などでも、位置関係が反対にならないよう心掛ける（ただし法量や動線の関係で無理な場合もある）。例えば、速報展「浄土宗を支えた版木 其ノ壺—紙嘉・前田嘉右衛門が受け継ぐ—」（2022）では、展示室の両端に設置した展示ケース（行灯型）に、一具ではない善導大師像と法然上人像の版木をそれぞれ展示。その間の展示ケース（視き型）に阿弥陀経の版木や阿弥陀如来を表した念仏図の版木を展示した。各々独立した展示品であるが、展示空間のなかで浄土宗的な配置を構成する「コト」は、ある種の安定感をもたらし、また展示のコンテキストとは異なるコラム的な話題提供となる。あるいは両大師の配置が逆であった場合、浄土宗関係者は少しく違和感を抱いたかもしれない。

おわりに

以上、仏教文化の視点から「ミュージアムでみせる宗教文化」に寄せた報告とする。なお本稿にはフォーラム登壇時には触れられなかった事項を幾つか含めた。また原稿提出までの期間には、企画展「拝まれてきた仏像—ふたたび拝まれる日をまつ—」（2023）の準備を進めており、2023年の秋、無事に開幕を迎えた。

2024年、浄土宗は開宗850年を迎える。この慶事の裏で、解散手続きを進めている寺院がある。過疎化、少子高齢化などを背景とする、寺院の消滅。解散寺院に祀られていた仏像を展示するとともに移安先を探す。もうひとつの開宗850年。図らずもこの展覧会では、「展示するモノ」と「展示するコト」が完全に一致した。

キリスト教展示の現状と課題 —諸教会の文化をいかに展示するか？—

下園 知弥

はじめに

文化の多様性 cultural diversity は、今日の文化理解における最も重要な概念の一つである⁽¹⁾。教育という観点から言えば、私たちの社会の中で形成されてきた文化の数々には独自の形態と文脈が存しており、そこには何らかの固有の意義があるのであるから、継承者の多寡による優劣や社会への影響力といった力関係に基づく価値観とは切り離して個々の文化を尊重する、というのが今日の教育者一般に求められる基本的態度であり、この抽象的な指針をいかにして具体的に実践していくかが、現代の教育現場が直面している課題の一つである。これは社会教育施設の一つである博物館においても例外ではない。

文化一般に関わるムーヴメントとして多様性をめぐるさまざまな動きがある一方、キリスト教という宗教においては、前世紀より継続してエキュメニズム ecumenism (教会一致促進運動)⁽²⁾が進んでいるという流れがある。エキュメニズムとは、教派の別を超えてキリスト教全体としての一致を目指す運動・思想であり、神学思想から信徒の実生活の領域に至るまで、さまざまな文脈で一致の可能性が検討され、実践されている。注意したいのは、エキュメニズムは教派の別を解消して一つの合同教会のようなものを作るのが目的ではなく、教派の別・教義の別を維持したままそれぞれの教会が一致できる地点を探るのが目的だという点である。つまり、エキュメニズムにおいては、一致と同様に多様性も重視されているのである。

上記の特性から明らかなように、文化の多様性とエキュメニズムは決して断絶した別々のムーヴメントではない。宗教を文化の一種として捉えるならば、この二つの流れは全体と個別の関係にあると説明できるかもしれない。あるいは、あくまでも異なる文脈で発展してきた別々のムーヴメントだと理解するにしても、今日の諸議論において両者の交わる点は無いとまでは言えないであろう。いずれにしても、この二つの流れの中に身を置く「キリスト教文化の展示をおこなうミュージアム」は、各教派の多様な在り方を尊重しつつその展示をおこなうということが求められている時代状況

の中に在るのである。

本稿⁽³⁾では、そのようなミュージアムの一つである西南学院大学博物館の展示事業について、その特色を示したうえで、教派の多様性についての意識がどのように展示の中に反映されているのかという現状の取組と、その取組の中で見えてきた課題について、当該館の学芸員の視点から紹介する。

1. 西南学院大学博物館の沿革・使命・特色

福岡県福岡市の西新に所在する西南学院大学は、1916（大正5）年にプロテスタント諸派の一つであるバプテスト Baptists に属する米国南部バプテストの宣教師 C. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier, 1879-1933）によって創立された私立西南学院（旧制中学）にルーツを持つ大学である。西南学院大学の附属施設として2006（平成18）年に開館した西南学院大学博物館（ドージャー記念館）は、現存する西南学院最古の建築物でありヴォーリズ建築⁽⁴⁾としても知られている西南学院旧本館・講堂（福岡県指定有形文化財）を、1921（大正10）年竣工当時のすがたに復元しつつ、博物館として改修した施設である。そのため、この大学博物館は、博物館としては比較的新しい存在でありつつ、建築物としては博物館よりも遥かに長い時間の積み重ねを持っているという、いわば二重の歴史に彩られたミュージアムとなっている。

西南学院大学博物館の経営理念（使命）は、「キリスト教主義教育という建学の精神にもとづき、具体的なモノ（博物館資料）をとおしてキリスト教文化の理解を深めることで、学生の教育に取り組み、その成果を学内のみならず地域社会にも発信する」⁽⁵⁾というものであり、この理念に即しつつ、来館者に求められているニーズ、大学博物館としての役割、時代の要請等を考慮して、四つの具体的な目標が事業の基本的な指針として設定されている。その四つとは、①「キリスト教文化の研究と展示」、②「博物館教育の支援と推進」、③「地域社会への発信と貢献」、④「現代社会への共感と提言」である⁽⁶⁾。また、目標として明文化されているわけではないが、上記の歴史的背景ゆえに建物や学院の歴史に関心を持って来館する市民も多いため、建築の魅力と学院の歴史を感じてもらうことも運営の基本コンセプトとして意識するようにしている。これらの使命・指針・コンセプトに即して、西南学院大学博物館は展示のみならずワークショップや市民講座、学術シンポジウム等、さまざまな活動に日々取り組んでいるところである。

キリスト教文化の教育・発信を事業の核としているというだけでも日本のミュージアムとしては大いに個性的だと言えるが、西南学院大学博物館の事業には更に個性的な特色がある。それはすなわち、「キリスト教の諸教会（教派）の文化を幅広く扱っていること」である。事実、西南学院大学博物館はこれまでにカトリック（および

キリシタン）・正教会・プロテスタント諸派（特に西南学院大学のルーツであるバプテスト）のそれぞれに注目し、さまざまな企画を立案・実施してきた。特に博物館事業の要たる展示事業においては、テーマや資料が一つの教派に偏りすぎないように、バランスを強く意識してきた。もっともこの特色は、使命や指針のような、その博物館が一貫して目指すべき方向性として設定されたものではなく、いわば組織文化として学芸系職員の間で継承されてきたものに過ぎない。その意味で、いつ失われてもおかしくない不安定な特色ではあるが、しかしながら、この特色こそが、他のキリスト教文化を扱う博物館と比較して尚西南学院大学博物館が個性的であると断言できる要素になっていると報告者は考えている。そのため、同博物館の学芸員として勤務してきた報告者は、この特色を最大限意識しながら、さまざまな展示事業に取り組んできた。

以下の項では、上記の特色を反映した展示の取組事例、および取組の中で報告者が気づいた課題についてそれぞれ紹介する。

2. 展示の現状—これまでの取組事例—

諸教会の文化を幅広く扱うという特色は、西南学院大学博物館の常設展示と特別展示（特別展・企画展）⁽⁷⁾の双方に反映されている。常設展示については、展示室の細かなレイアウトや展示資料の内容・点数が年に複数回のペースで入れ替わっている

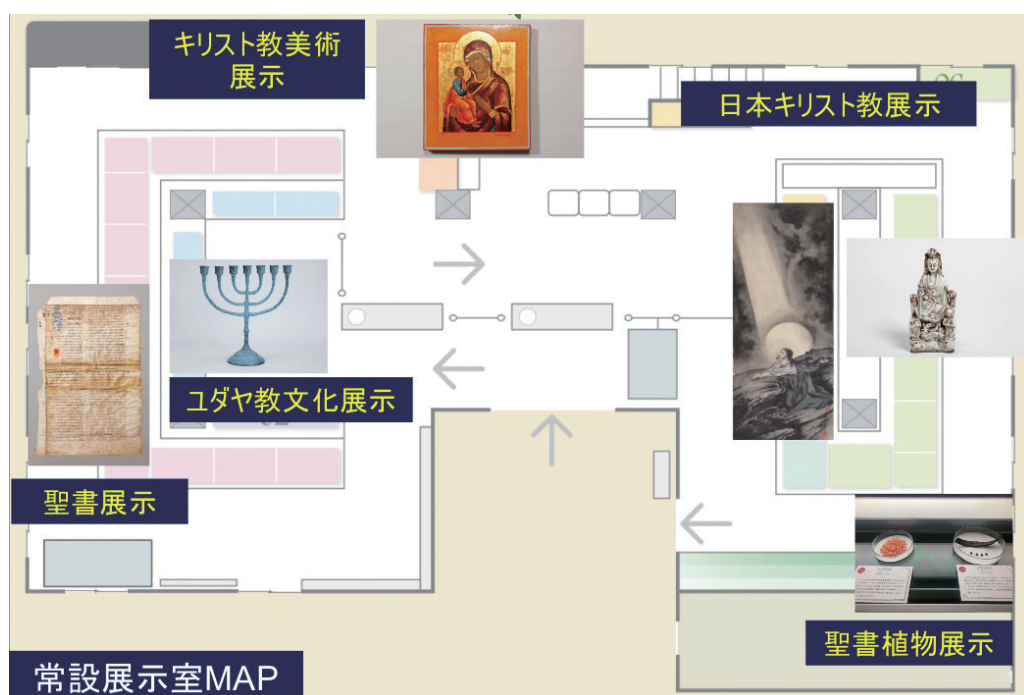


図1 常設展示室の展示構成（報告者作成）

ものの、展示構成の大枠は一貫しており、「ユダヤ教文化展示」「聖書展示」「キリスト教美術展示」「日本キリスト教展示」「聖書植物展示」が基本構成となっている(図1)⁽⁸⁾。この構成の中で、「キリスト教美術展示」として設定されている区画では、カトリック文化圏の装飾写本や聖画、正教会のアイコンなどが展示されており、主にカトリック・正教会の文化を学ぶことができる。これに対して、「日本キリスト教展示」では、キリスト教の到来・禁教を紹介したのち、開国およびキリスト教解禁後の動向を紹介する区画において、幕末から明治期にかけてのカトリックの再布教やプロテスタントの宣教活動およびその影響がわかる資料の展示をおこなっており、カトリック・プロテスタントの諸相を日本史の文脈で学ぶことができる。このように、すべてを平等に満遍なく扱っているわけではないが、少なくともカトリック・正教会・プロテスタントという大きな区別があることは常設展示を通じて知ることができるように構成されている。

また、常設展示と特別展示の中間的な位置付けとして、西南学院大学博物館では「テーマ展示」や「博物館ニュース展示」という展示も実施している。テーマ展示は、常設展示室の一区画を使用して、同一テーマに基づく資料数点を期間限定で展示するという企画であり、普段展示していない資料の公開や学芸系職員（特に学生アルバイトである学芸調査員）の実践的教育といった狙いがある。諸教会の文化の展示という文脈で言えば、この種の企画展示には常設展示で偏っている教派のバランスを一時的に矯正できるという効果があり、実際これまで実施してきたテーマ展示の中にはそのような狙いで企画・実施されたものもある。博物館ニュース展示は、西南学院大学博物館で年に3号発行している『西南学院大学博物館ニュース』⁽⁹⁾の所蔵品紹介特集で取りあげた資料の実物を常設展示室内で展示するという企画である。実現までの準備プロセスは異なるものの、展示の性質的には上記の「テーマ展示」とほとんど同じであり、この展示にも常設展示では普段見ることのできない資料が展示できるという同じ利点がある。しかも『西南学院大学博物館ニュース』の所蔵品紹介は、それ自体特定の教派やジャンルの資料ばかり紹介しないことを基本コンセプトとしているため、「博物館ニュース展示」においても同様に教派の偏りを解消するという効果が期待できる。これらの小規模展示企画は、担当する職員にとっても負担があまり大きくないため、バランスの偏りを比較的手軽に修正できるというのが最大の長所である。したがって、これらの展示企画については、その長所を自覚しつつ、今後も積極的に活用していくべきであると報告者は考えている。

上記のような期限付きの展示企画や展示資料の入れ替えによって多少の調整は可能であるものの、展示構成の基本構成が変わらない以上、常設展示室で展示することのできる資料のバリエーションや点数にはどうしても限界がある。たとえば、そもそもの展示室の構成が宗教改革やプロテスタント諸派の教義・歴史を紹介することを

主眼としていないゆえに、西南学院大学博物館の常設展示室でプロテスタントについて——総合的にであれ特定の教派についてであれ——詳しく紹介することは困難である。しかし宗教改革は、キリスト教の歴史を知る上で、とりわけカトリックとプロテスタントの歴史を知る上で、決して無視することのできないトピックの一つである。このような、常設展示が対象にしていない、けれども諸教会の文化を幅広く紹介するためには避けて通れないテーマについて展示をする際に活用されるのが、常設展示室と文脈を切り離せて且つ特定のテーマを大々的に取りあげることのできる特別展示である。

西南学院大学博物館の特別展示がいかに「教派のバランス」を意識しているかが分かる例として、2018年度から2019年度にかけて実施された展示企画の一覧⁽¹⁰⁾(下記)を見てみたい。

2018年度企画展	地下墓地カタコンベの世界 [カトリック]
2018年度企画展	東方キリスト教との出会い：祈りのかたちとその拡がり [正教会]
2018年度特別展	キリシタン：日本とキリスト教の469年 [カトリック（キリシタン）]
2018年度企画展	宗教改革と印刷革命 [プロテスタント（特にルター派）]
2019年度企画展	ねこ学への招待 [非キリスト教的テーマ]
2019年度特別展	明治日本とキリスト教：蒔かれた種 [プロテスタント・カトリック]
2019年度特別展	聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開 [諸教派]
2019年度企画展	文化財とともに生きていく：ドージャー記念館 次の100年 に向けて [学院史]

この一覧から明らかなように、2年間計8回の展覧会において、カトリック・正教会・プロテスタントのすべてが一度は中心テーマに設定されており、且つ一つの教派が連続して中心テーマに設定されることもなかった。また、教派の多様性という観点からとりわけ象徴的なのは、2019年度特別展「聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開」である（図2）。この特別展は、報告者自身が企画・担当した展覧会であり、企画の意図からして、現在の主題である「諸教会の文化を幅広く扱うこと」を一つの展覧会として実現・可視化することが主眼であった。テーマを広く設定しすぎたため結果として各教派の紹介がごくごく簡潔なものになってしまったという反省はあるものの、西南学院大学博物館の特色を内外に明示するという意味で、実施する必要も意義もあったと報告者は考えている。

残念ながら、2020 年度以降は、コロナ禍や学芸系職員の退職・交代等の事情により、この 2 年間と同程度のテーマ・バランスを保つことはできなくなってしまっている。とはいえ、バランスに対する意識自体が失われたわけではなく、展覧会のテーマが偏ってしまった場合は常設展や他の企画で調整するという方向で考えており、常設展単位・特別展単位でバランスを意識するのではなく（実現できればそれは一つの理想ではあるが）西南学院大学博物館の事業の総体で可能なかぎりバランスを取る、というのが現在の考え方である。

3. 展示の課題—キャプションにおける用語・訳語の選択をめぐる—

さまざまな教派の文化をテーマとする展示企画を実施してきた中で報告者が気づいた一つの大きな課題は「用語・訳語」の問題である。日本において一般に知られているキリスト教の用語・訳語の多くはカトリックのそれであり、それと同等ないし次点でプロテスタント（「牧師」など諸派で共通の用語の場合）となっており、正教会の用語・訳語はほとんど知られていない。たとえば、イエス・キリストの母マリアをどのような称号で呼ぶか、また日本語に翻訳するかは教派によって異なっており、カトリックでは「聖母」の称号がしばしば用いられるのに対して、プロテスタント諸派では聖母の称号は使用されない傾向にある。しかし「マリア」という人名表記は双方に共通している。これに対して正教会では、「生神女（しょうしんじょ）」という称号が一般的であり、人名表記も「マリヤ」とされている⁽¹¹⁾。したがって、正教会の用語・訳語としては「生神女マリヤ」と表記するのが正式（一般的）なのであるが、この表記をキリスト教関係の書籍や印刷物で見たことがある人はほとんどいないであろう。

このような用語・訳語の偏りの原因は、日本とキリスト教の歴史的関係もさることながら、各教派の信徒数、すなわちマジョリティかマイノリティかに依るところが大きい。文化庁統計『令和 3 年度 宗教年鑑』⁽¹²⁾によれば、令和 2 年度のカトリックの信徒数は 524,338 人、プロテスタント（諸教派の総計）の信徒数は 506,572 人、そして正教会の信徒数は 8,991 人となっている。つまり、正教会は現代日本においてマイノリティであるがゆえに、その中で使用されている用語・訳語も一般に知れ渡っていないのである。

正教会がマイノリティであること、それゆえに正教会の用語・訳語が一般的ではないのは如何ともしがたい事実であるとして、問題となるのは、この「一般的ではない」用語・訳語を博物館の展示へいかに取り入れるか、という点である。多様性の時代において求められるべき教育の方法は、それぞれの文化を尊重し、言及する際は可能なかぎり元の文脈を保つことである。現在の主題に即して言えば、各教派の文化について解説する際には用語・訳語もその教派のものを使用する、という態度が原則として

博物館には求められる。ではそれは現実的に可能なかと問われれば、可能な場合もあれば非常に難しい場合もある、というのが報告者の率直な所感である。

一つの教派だけに絞って特集している特別展や企画展、あるいは解説のための紙面を大きく確保できる媒体（ポスター展示など）の場合には、各教派の用語・訳語の別はそれほど問題にならない。たとえ一般的でなくとも、丁寧に解説すれば良いからである。しかしながら、常設展示においては事情が大きく異なる。先に示したように、西南学院大学博物館の常設展示は、一つの展示室の中に複数の教派の関連資料が混在するという構成になっている。展示によっては、教派の文化の違いを明瞭にするために、異なる教派の類似したテーマの資料を並置することもある。それでは、このような展示構成において「各教派の文化について解説する際には用語・訳語もその教派のものを使用する」という原則を厳格に適用した場合、キャプションはようになるだろうか。可能性は二つ考えられる。一つは、狭い余白・小さいフォントサイズで用語・訳語について事細かに補足解説されているキャプションになるという可能性。いま一つは、特に説明もなく新出の用語・訳語が頻出するキャプションになるという可能性。



エルサレムスカヤの生神女

Theotokos of Jerusalem

1816年／ロシア／板にテンペラ、金箔

本資料は生神女マリヤを主題にした「エルサレムスカヤ（エルサレム）の生神女」と呼ばれるタイプの正教会のイコンである。背景に金箔を用いており、すりつぶした顔料を卵黄で溶いたテンペラ絵具で彩色する伝統的な技法で描かれており、銘文や生神女の衣には優美な装飾描写が見られる。本資料は2020年に修復し、一部剥落箇所が補彩されている。



時禱書零葉「受胎告知図」

Book of hours (Page of "The Annunciation")

1500年頃／ヨーロッパ／羊皮紙に活版・木版、彩色、金箔

15世紀末頃に出版された初期活版印刷本（インキュナブラ）の断片。時禱書と呼ばれる祈禱書の一種であり、聖母マリヤへの祈りの箇所との挿絵であると考えられる。画面を装飾する金箔は、聖母を中心として図像全体を輝かせており、聖霊から聖母へ注がれた神の光の充溢を表現しているかのようである。

図3 各教派の用語・訳語に即したキャプションの例

上は正教会、下はカトリックの用語・訳語を採用しており、下線部分が該当箇所である。

言うまでもなく、どちらも博物館のキャプションとして望ましいスタイルではなく、来館者の混乱を招く結果となるだろう（図3）。そのため、西南学院大学博物館では、現状、先の原則を厳格に適用するということはない。

次善の策として現在採用しているのは、各教派の文化が誤解されないよう配慮しつつ、基本的にはマジョリティであるカトリックの用語・訳語を使用する、という方針である。たとえば図3は、それぞれ正教会とカトリックにおいて一般的な用語・訳語を忠実に採用したキャプションの例であるが、キリスト教についてほとんど知識を持たない人は元より、キリスト教の信者や研究者でさえ、正教会との接点がなければ、上側の正教会の用語・訳語が使用されたキャプションを見て困惑する可能性が高い。それゆえ、実際には、上側の資料のキャプションは「生神女」を「聖母」に、「マリヤ」を「マリア」に変えたものを採用している。

むろんこのやり方を採用したのは、それによって正教会の信仰・文化の要点が誤解される可能性は低いと判断したからである。また、こういった方法を採る場合は、博物館ニュースや研究叢書といった紙面を大きく確保できる別の媒体で用語・訳語について解説することで可能な限りフォローするようにもしている⁽¹³⁾。もっとも、先に「次善の策」と言ったように、報告者自身これが最良の解決策だと考えているわけではない。これはあくまでも当代の学芸員である報告者が思いついた現実的な「妥協案」であり、さしあたり採用されている事例に過ぎない。したがって、この問題については、今後も試行を繰り返し、他館の事例も調査することで、より良い解決策を見つけなければならないと考えているところである。

おわりに

本稿では、「教派の多様性」という観点から、西南学院大学博物館の展示事業について、現在の取組事例とその課題について紹介した。一つの教派に限定せず複数の教派について紹介するという試みは、文化と宗教に関わる時代の流れを色濃く反映しており、西南学院大学博物館の個性的な特色でもあるため、今後も継続していくのが望ましいと考えられる。しかしこの試みを継続していくということは、用語・訳語をどう選択していくかという課題とも向き合い続けなければならないことを意味している。遺憾ながら報告者自身は自他共に納得させられるような解決策を考案することができていないが、西南学院大学博物館には学芸員以外にも多くの学芸系職員が在籍しており、また職員の入れ替わりもあるので、今後の変遷の中でいつかより良いアイデアが生み出されるだろうという楽観的な期待を持っている。

また、本報告では用語・訳語にのみ課題の内容を絞ったが、「教派の多様性」に関して今後考えなければならない課題は他にも沢山あることを付言しておきたい。

たとえば、博物館の展示で紹介する教派をどこまで拡大するか（拡大できるのか）という課題は、既に館内で表面化している問題である。本報告ではカトリック・正教会・プロテスタントという大枠で教派の別を語ったが、プロテスタントは西方教会にルーツを持つカトリック以外の複数の教派の単なる総称に過ぎず、正教会も同様に総称的な枠組みでその中に複数の異なる文化を持つ諸教会が存在する。前二者に対してカトリックは統一された教派なので安心かと言えば、カトリック内の多様性やカトリックが異端・異教としているキリスト教的グループをどう扱うかというまた別の問題がある。もちろんこれらのすべてを細分化して個々に取りあげることは、現実的に考えて不可能である。企画の数が膨大になるという点からしてもそうであるし、職員の能力（専門性）がすべてをカバーするにはあまりに微力である。

したがって、用語・訳語の問題にしても、扱う教派の拡大・細分化という問題にしても、理想は理想として、現在の職員には何がどこまでできるのかという現実的な視点を、私たち現場の職員は常に持つておく必要がある。しかしその現実的な視点を失わないで日々改善に取り組めば、博物館の展示は少しずつでも良いものになっていくはずであるし、10年後、20年後には報告者には想像もつかなかったような地点へと到達できるはずである。そのような未来への期待を以て、本稿を締めさせていただく。

注

- (1) 文化の多様性に関しては、2001年のユネスコ総会において採択・宣言された「文化的多様性に関する世界宣言 Universal Declaration on Cultural Diversity」が象徴的である。同宣言はユネスコのホームページ（下記 URL）を参照。
<https://en.unesco.org/about-us/legal-affairs/unesco-universal-declaration-cultural-diversity>
（最終閲覧 2023 年 10 月 30 日）
- (2) 教派を超えて一致を目指す運動自体はさまざまな時代・地域に見られるものであるが、現代の全世界的なエキュメニズムに関しては、1910年にエディンバラで開催された世界宣教会議がその嚆矢とされている（『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年、「エキュメニズム」の項を参照）。
- (3) 本稿は國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所主催の令和 4 年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」（2022 年 12 月 11 日開催）における口頭発表「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」の内容を加筆修正し報告書として再編したものである。
- (4) 「ヴォーリズ建築」は、明治期から昭和にかけて活躍した伝道建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880-1964）および彼の建築事務所が手がけた建築群を指す。ヴォーリズ建築は日本各地に数多く現存しており、西南学院旧本館・講堂のように文化財に指定されているものも少なくない。
- (5) 西南学院大学博物館ホームページ「使命と沿革」（下記 URL）を参照。
<http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/about/index.html>（最終閲覧 2023 年 10 月 30 日）
- (6) 同上。

- (7) 「特別展」と「企画展」の区別は博物館によって異なるが、西南学院大学博物館では主に展覧会事業の規模・予算に即して、規模・予算が大きいものを「特別展」、比較的小さいものを「企画展」としている。
- (8) 常設展示室の構成・主な展示資料については「博物館パンフレット」を参照（ホームページよりダウンロード可）。本文に図を掲載している常設展示室とは別に「ドージャー記念室（学院史展示）」も常設展示コーナーの一つとして西南学院大学博物館内に設置されている。
- (9) 『西南学院大学博物館ニュース』が1年に3号ずつの発行になったのは2017年度からであり、2009年度の創刊から2016年度までは1年に4号ずつ発行していた。
- (10) 本一覧は「企画展・特別展」に限定したリストであり、この他にも同期間には多数のサテライト展示やテーマ展示といった小展示企画が実施された。事例のサンプルが多くなりすぎるため本論では割愛したが、それらの小展示企画においても「教派の多様性」や「なるべく多くのテーマを扱う」といった意識は反映されていたことを付言しておく。
- (11) 本文に挙げたイエスの母マリアの称号は一例であり、カトリック・正教会には「聖母」や「生神女」以外にもさまざまな神の母の称号がある。また、プロテスタントと一言に言っても多くの教派・立場があり、イエスの母マリアについての認識も多様であるため、プロテスタントに分類される教派のすべてが聖母の称号を否定しているわけではない。
- (12) 文化庁宗務課による統計「宗教年鑑」は文化庁ホームページ（下記 URL）より pdf をダウンロードできる。
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/index.html（最終閲覧：2023 年 10 月 30 日）
なお、プロテスタントの信徒数については、カトリックと正教会以外のすべてのキリスト教系団体の信徒数の合計とした。
- (13) 図3で例に挙げた「エルサレムスカヤの生神女（聖母）」は、展示室のキャプションではカトリックの用語を使用しており特に補足説明もしていないが、『西南学院大学博物館ニュース』第47号（2022 年 12 月号）の所蔵品紹介では、「聖母」という称号の補足として、正教会の称号である「生神女」や「至聖女」にも言及している。